

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考	
(ト)	縫合糸	スパンナイロン	20本		反のつなぎ目を縫合する。	
(チ)	補強糸	スパンナイロン	16本	0.53m	9	身網の下辺の4目に沿わせて、錘を取り付ける部分を補強する。
(リ)	錘	コンクリート	自家製 2 cm厚 H17.5×W16.5 cmの半円形 500~600g	9	9	網長で9.88m間隔で、補強した4目を束ねて、紐で結び付ける。
(ヌ)	浮標	発泡スチロール	旗付き	2	1連分	
(ル)-1	浮標網 -1	ダイヤロン	6 mm	20m	2	浮標網上部
(ル)-2	浮標網 -2	ダイヤロン	9 mm	60~75m	2	浮標網下部

2) 漁法

1連30~35反を使用して操業する。

夕方投網し、投網から1時間後の日没後に揚網する。操業は潮流に影響されない。

3) 使用漁船および乗組員

3~5トン

4) 漁期・漁場

漁期は12月で、漁場は水深約40mほどの底質が泥の海域である。

5) 漁獲物

シロザメ (地方名ノーソ) など、サメ類 (3~4 kg)。

ほか、サワラ (3 kg以上)、スズキ (2 kg以上)、ハモ (4 kg程度) など。

(4) まき刺網類

44 ボラ罠刺網〈五島編〉

調査地 富江町富江

1) 漁具

(1) 見取図および一般構成

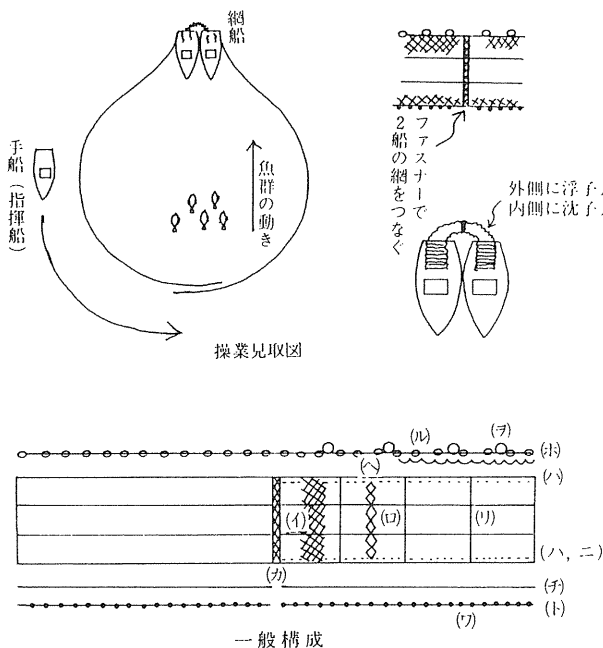


図44-1 操業見取図および一般構成

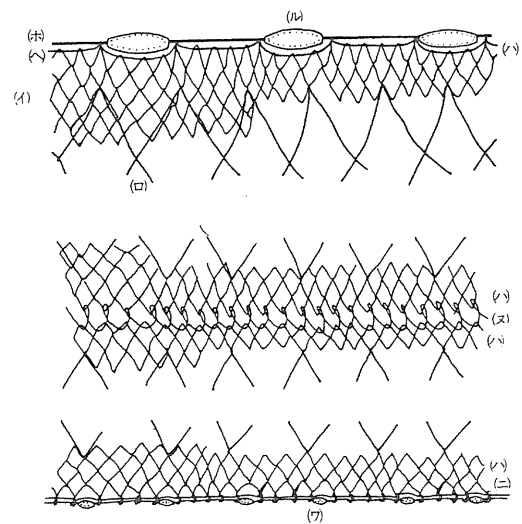


図44-2 一般構成の拡大

## (2) 漁具仕様

表44 仕様表

## (イ) 網類

符号	名称	材質	太さ	目合	掛目	長さ	仕立上長	備考
(イ)	内網	ナイロン	2子8本	10.5cm	50目	1430目	75m	縮結0.5
(ロ)	外網	〃	2子14本	33cm	30目	358目	〃	15目折り返し、外網1目に内網4目
(ハ)	縁網1	スパンナイロン	18本相当	10.5cm	1目	1,430目×2	〃	身網の上下に各1目ずつ
(ニ)	縁網2	〃	21本相当	〃	0.5目	1,430目	79.5m	縦3反つなぎの沈子方にとりつける。

## (ロ) 綱類

符号	名称	材質	太さ	長さ	本数	備考
(ハ)	浮子綱	ポリエチレン	9mm	75m	1本	浮子、沈子方とも両端に30cmの連結綱を出す。
(ヘ)	目通し糸	クレポリ	2mm		〃	浮子綱と張々にとる。
(ト)	沈子綱	〃	5mm	79.5m	〃	沈子綱と沈子添綱は逆撚り。
(チ)	沈子添綱	〃	〃	79.5m	〃	
(リ)	たて筋綱	スパンナイロン	30本相当		〃	内網の目毎に結ぶ
(ヌ)	かけ合せ糸	〃	16本相当			縦3反、横8反のかけ合せ、5目毎に結ぶ

## (イ) その他

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
(ル)	浮子1	合成樹脂	E-8	159個	内網9目に浮子1個
(ヲ)	浮子2	〃	フロートンK8-3N	6個	1反に6個
(ワ)	沈子	鉛	150g(40匁)	318個	内網9目に浮子2個
(カ)	ファスナー	プラスチック	YKK	1本	漁業用

## 2) 漁法

日の出後の午前7時半頃、手船1隻、網船2隻の1船団で出港し漁場へ向う。漁場に到着くと、水面が黒っぽい所やボラのハネなどを目視観察する。魚群をみつけると各船に無線で連絡し、3船が集結し操業体制に入る。網船2隻は綱で結び、両船の船尾部に積んだ刺網をファスナーで連結する。手船(指揮船)は魚群の沖からその動きを観察し、網船を魚群の後方につけさせ、いつでも投網出来るように指示する。手船は魚群が網船の方へ向い始め、魚群と網船の間隔が適当な距離になった時投網の指示を出し、魚群の後方へ廻る。網船は魚群を左右から包囲し、投網終了時には打廻した刺網が2重(10~50間)になるようにする。両者の間隔を狭くした後、3隻とも網の中に入り、全速で10分ぐらい走り威嚇する。魚が網に刺したのを確認して手船のアンカーを入れ、乗組員は2隻の網船に乗り移る。網船は内側の網から揚網し、他船も外側の網を揚げ中間点のファスナーをはずす。揚網時の乗組員の配置は沈子方1人、中網2人、浮子方1人である。揚網終了後手船へ乗組員を移し、帰港して漁獲物の処理を行う。漁獲物の処理を終り、網の整理が出来、時間的に余裕があれば再び出漁する。

操業回数は1日1~2回(通常1回)で、1ヶ月に7日間、10回ぐらいである。

## 3) 使用漁船および乗組員

網船は2.5トン、12馬力2隻、手船(指揮船)3トン、25馬力1隻、計3隻からなる。

乗組員は網船各3人、手船2人の8人である。

## 4) 漁期・漁場

漁期は10月10日から11月10日までの1ヶ月間である。漁場は共同漁業権内の水深10m以浅で5m前後が最適である。

## 5) 漁獲物

漁獲物はボラで、雌だけ開腹して卵巣を出し、塩蔵して組合を通じ出荷する。

好漁年では1ヶ月1,500腹(1腹400g)を製造する。価格はkg当り7,000~8,000円である。



## (2) 漁具仕様

表45 仕様表

## (i) 囲網

## (イ) 網類 ※

符号	名称	材質	太さ	目合	掛目	長さ	仕立上長	備考
(イ)	身網 1	パイレン	3子15本	5節	200目	6.7m	10×5m	縮結：浮子方0.33 さがり0.25
(ロ)	身網 2	〃	〃	〃	600目	10.7m	30×8m	〃
(ハ)	身網 3	〃	〃	〃	1,600目	13.4m	80×10m	〃
(ニ)	身網 4	〃	〃	〃	4,000目	4.0m	200×3m	〃
(ホ)	浮子縁網	スパンナイロン	32本相当	〃	0.5目	480m	320m	〃
(ヘ)	沈子縁網	〃	〃	〃	〃	480m	352m	縮結0.27

## (ロ) 網類

符号	名称	材質	太さ	長さ	本数	備考
(ト)	浮子網	クレポリ	7mm	320m	1本	長さ10+30+80+200=320m
(チ)	目通し糸	スパンナイロン	46本相当		〃	浮子間で浮子網より浮子1個分長い
(リ)	沈子網	クレポリ	7mm	352m	〃	沈子網と沈子添網は逆擦り
(ヌ)	沈子添網	〃	〃	〃	〃	
(ル)	たて筋網1	スパンナイロン	46, 32本	5m	各2本	46本を目通しし, 32本で目毎に止める
(ヲ)	〃 2	〃	〃	8m	〃	
(ワ)	〃 3	〃	〃	10m	〃	
(カ)	〃 4	〃	〃	3m	〃	
(コ)	かけ合せ糸	〃	32本		1本	反毎にかけ合わせる
(ク)	浮標網1~3	クレモナ	6~7mm	8.3m	25本	
(レ)	浮標網4	〃	3mm	16.5m	40本	
(ノ)	碇網	クレポリ	7mm	1.5m	2本	ダブルで使用
(ツ)	曳網	クレモナ	4分	30m	〃	
(ネ)	アンカー網	〃	5分		1本	

## (イ) その他

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
(ケ)	浮子 1	合成樹脂	140×35mm	399個	身網16目に1個(うち浮子下2目)
(セ)	浮子 2	〃	直径200mm玉	25個	身網1~3の浮標網に取付け
(ム)	浮子 3	〃	ポルセンN p-7	40個	身網4の浮標網に取付け
(ウ)	沈子	鉛	26.3g	3,200個	身網1目おきにつける
(ノ)	碇	自然石	5kg	1個	
(オ)	アンカー	鉄	〃	〃	

## (ii) 袋網

## (イ) 網類

符号	名称	材質	太さ	目合	掛目	長さ	仕立上長	備考
(ク)	上(天井)網	パイレン	3子15本	8節	200目	19.0m	10.5m	上網15mと袋尻の一部4m
(ケ)	下(敷)網	ポリエチレン	3子36本	12節	300目	19.5m	10.5m	下網15mと袋尻の一部4.5m
(マ)	脇網	パイレン	3子15本	8節	400目	15.0m	10.5m	両脇網分
(ケ)	縁網	スパンナイロン	36本相当	8,12節	0.5目	33.9m	24.0m	ミト口で使用

## (ロ) 網類 ※

符号	名称	材質	太さ	長さ	本数	備考
(フ)	浮子網	クレポリ	7mm	33m	1本	上網に取付
(コ)	沈子網	〃	〃	43.5m	〃	下網に取付
(ニ)	脇網 1	〃	〃	6m	2本	袋尻に取付
(セ)	脇網 2	スパンナイロン	3mm相当	〃	〃	ミト口に取付
(ヲ)	結び網	クレポリ	7mm	1m	4本	ミト口の四隅と囲い網の結合に使用
(オ)	引上げ網	クレモナ	4分	8m	3本	ミト口の沈子網の両端と中央に取付

イ) その他

符号	名称	材質	規格・寸法	本数	備考
(キ)	浮子 1	合成樹脂	ビニー3TB-5	8個	ミト口の浮子綱に取付
(ク)	浮子 2	〃		26個	ミト口以外に取付, ミト口の隅から70cm離す
(ケ)	浮子 3	〃	直径200mm玉	3個	ミト口の引き上げ綱に取付
(ニ)	沈子 1	鉛	75g (20匁)	31個	ミト口の沈子綱
(ホ)	沈子 2	〃	〃	127個	ミト口以外, 1.5mに5個

※ 浮子綱が水面下に沈むように作られているのは、包囲圏を小さくするまでは出来るだけ魚を威嚇しないように配慮されているためである(浮子方が水面上に出ると魚がおじて底へ潜ろうとする)。網丈が部分的に異なるのは打廻しの水深が異なることと上述の威嚇を小さくするためである。

2) 漁法

出港して5時間、男女群島の男島に到着すると海岸線に沿って魚群探索を行う。水面に口を出して滞泳している大きなメジナの群を見つけると操業体制に入る。まず、投網前に袋網の敷設場所(海底が平らで、かかりものない所)を確認し、本船をやや沖合に投錨して、乗組員は作業船に移り囲い網の投網にかかる。

投網は先程調べた海底状況の良い所から図46-1のように打廻す。打廻す時の乗組員の配置は漕ぎ手2人、沈子方1人、浮子方1人、浮標綱の所に1人の計5人からなる。打廻しが終わると浮標綱のたるみを取り、余った綱は垂下させたまま(威嚇効果となる)投網を終了し追込みにかかる。まず、1人が岸に泳いで渡り作業船のアンカーを岩にかけ、ローラーでアンカー綱を締めながら囲い網を岸沿いに包囲する。アンカーの位置を変えてこれを繰返し、包囲圏を狭くする。包囲に必要ななくなった網は浮標綱を取りはずし、船上に引き揚げる。この作業中、網が岩などにかかった時は泳いで行き、浮標綱を引いて岩をかわす。低い網(身網4)が船上に上り、高い網(身網3)が岸までくると両者を切り離し、もう一度、船上に上げた囲い網を岸沿いの岩場の沖側に打廻し、メジナが岩場に逃げ込むのを防ぐ。追込みを開始し、高い網を低い網沿いに包囲していくとメジナの動きが活発になり始める。ここで追込みを中止し、潜水して沈子綱に小石のをせ、群の泳ぐ勢いで網裾が浮き、魚が逃げ出すのを防いでから袋網の敷設を行う。袋網は囲い網の中に潮を受けて広がるように張り込む。再び追込みを開始し、左右の囲い網を袋網に寄せる。袋網の入口の脇と囲い網の脇を結び、メジナが袋網の脇から逃げないようにする。ここで、メジナを袋網に追込み網口の沈子綱に取付けた引揚綱を揚げて漁獲する。

漁獲物は袋網に入れたまま魚がすれないようにゆっくり本船へ運びタモ網ですくい上げる。漁獲が多い時や、生かす時は本船を袋網につける。漁獲物は水氷に入れた後、箱立てし、氷をかけ魚倉に入れる。その後、網を引き上げ、本船へ移し、操業を終了する。操業時間は1回に8時間ぐらいかかり、魚の箱立、本船への網上げなどに更に3時間を要する。そのため操業は1日1回、1航海5日、操業期間3日である。

3) 使用漁船および乗組員

本船は19.9トン、130馬力、作業船は1.2トン、船外機(操業中は使用しない)、揚網機(バッテリー使用、毎日充電)を装備している。乗組員は5人である。

4) 漁期・漁場

漁期は6～12月(盛期6～10月)である。4～5月にも操業出来るが定置網が敷設されるため禁漁となる。漁場は男女群島男島の水深8ヒロ以浅の沿岸部である。

5) 漁獲物

漁獲物はメジナ(1箱6尾入り、1尾1kg)主体でヒラマサ(2kg)やカンパチ(2kg以下)などが混獲される。漁獲量は1網平均100～200箱、1網最高500箱である。

- ・潮の変わり目、おだやかな時が良い、朝夕のまずめには関係ない。
- ・メジナは集群しようとする性質があり、分散しても少し威嚇するとすぐ1群にまとまる。しかし、強く威嚇すると潜り、岩などにかくれて、水面へ浮かなくなる。
- ・低い網(身網4)を揚げ終ればほぼ成功する。
- ・1航海に砕氷4トン、魚箱(3寸箱)500箱を積み込む。
- ・沖縄の追込み網を導入したが、人件費がかかり余り成果は上らなかった。